

第3は超高齢社会における医療の今後のあり方である。日本の病院は明治期以来、民間が中心となって建設されてきた。国・自治体の公的病院、日赤・済生会などの準公的病院は戦後になって作られたが、現在でも大半は私立の病院である。医療の費用は公的な国民皆保険制度が、医療の提供は主として民間が支えている。超高齢化社会を前にして、医療を病院で完結させるのではなく、患者の居宅を含めた地域で完結する医療が必要になる。治療後の居宅での生活を支える介護の体制と総合診療医の育成が求められる。

第4は治療法の研究開発の現況と今後である。薬にはプラセボ効果があり、効果の判定には二重盲検法が必要である。サリドマイドのように販売後に副作用が発見されることがある。ペニシリンに始まる抗生物質、胃潰瘍治療薬のシメチジン、

ピロリ菌に対する除菌療法などは医療を大きく変えた。日本の医薬品と医療機器は輸入超過になっており、医薬品産業や医療機器産業の育成が望まれる。医学論文数の国際比較において、日本の基礎医学は3位と健闘しているが、臨床医学は18位と立ち後れている。大型の臨床研究を組織する公衆衛生学の専門家の育成が遅れているためである。

本書で述べられているのは、まさに日本の医療の現代史である。医学史研究を行う者にとって、出発点となる現代の医療について知るための最適の著作として紹介する次第である。

(坂井 建雄)

[岩波書店, 〒101-8002 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5, TEL. 03 (5210) 4000, 2014年7月, 新書判, 228+2頁, 780円+税]

書籍紹介

八木聖弥 著

『近代京都の施薬院』

中世文化史を専攻しておられる八木聖弥氏が京都府立医科大学で人文・社会科学研究室に所属して、医学生に教養教育として歴史を教える模索の中から、明治に京都において施薬院の復興を試みた安藤精軒を中心とした近代京都の医療史を著しているのを紹介する。

光明皇后の仁慈により『施薬院』がつくられたが、その貧窮病者救済の思想は、豊臣秀吉の時代に全宗施薬院の世襲名跡となり明治維新まで続いて、明治に廃された。日野鼎哉、安藤桂洲、笠原良策を師として医家となった安藤精軒が、明治維新を越えて、京都において開業医として、種痘医、地方衛生会委員をつとめ、京都医会発起人の一人ともなり、その後『施薬院』再興を發議し、京都の慈善救貧病院を明治30年には実現したことを詳述している。明治37年以降『施薬園』は、京

都施薬園協会により運営されたが、安藤精軒は大正7年に没する。『施薬園』は昭和16年には京都厚生病院となり、昭和17年の国民医療法公布後、日本医療団のもとに京都府中央病院となり、戦後、京都市中央市民病院を経て、市立京都病院と統合され、現在は京都市立病院となっている。その黎明期を安藤靖軒の事績を中心に一次資料を基に著している。本文は次の三章及び年表より成る。

第一章 東三本木治療場の創設

第二章 施薬園の再興

第三章 施薬園の発展と終焉

安藤靖軒・施薬園関係年表

(渡部 幹夫)

[思文閣出版, 〒605-0089 京都市東山区元町 355, TEL. 075 (751) 1781, 2013年10月, A5判, 304頁, 3,500円+税]

尾脇秀和 著

『近世京都近郊の村と百姓』

本書は、山城国乙訓郡石見上里村（現京都市西京区）の庄屋・大島家を分析対象とした、近世後期の都市近郊村落に関する専門的な実証研究である。庄屋といっても、大島家は豪農とよべるほど村で経済的・政治的に突出した存在だったというわけではなく、輪番で村役人をつとめる家のひとつだった。大島家の興味深いところは、生業上農耕に従事しつつも、元来正親町三条家の家来であり、手習師匠や医師としても活動するなど、多様な側面を有していたことである。

以下に本書の目次を紹介する。

序章	本書の研究視角と構成
第Ⅰ部	石見上里村の変容
第一章	相給支配構造と株百姓の実態
第二章	文政期の村方騒動と百姓の老人兩名
第三章	村役人層の変容—「家記」編纂の意識とその社会的背景
第Ⅱ部	大島家の変容
第四章	大島家の老人兩名—大島数馬と利左衛門
第五章	大島家の学芸活用
第六章	在方医師の活動実態
第七章	在方医師と村—変死隠蔽事件を事例として

終章 　　まとめと課題

付論一 　大島家の病と地域の医療

付論二 　文政期・継嗣武幸の病

付論三 　治療と看病—直良の晩年と息子直珍

医史学とは、特に第五章以降に関連する。公家の家来でもあった大島家では医をふくむ学芸が継承されていたが、天明期以降の村落状況の変化を背景に、自家と村の危機に対応するに際して活用がはかられていく。大島家は折にふれて施薬（家伝薬の配布）を行っていたが、これがやがて収入を見込んだ医業へと展開する。本書では、医家としての大島家の往診内容やその地理的範囲、同業者や村方における他の住民との関係、家族の病歴などが史料にもとづき分析されている。「医学」というより「医師」の分析として興味深い。近世においては、制度や社会環境の地域差も大きく、医師は個々に多様な存在だったと考えられ、事例研究の蓄積が望まれている。その意味で、本書は貴重な貢献を成しているといえよう。

（永島 剛）

[思文閣出版、〒605-0089 京都市東山区元町 355、
TEL. 075 (751) 1781、2014年2月、A5判、294頁、
4,800円＋税]

ジョエル・F・ハリントン 著、日暮雅通 訳

『死刑執行人 残された日記と、その真相』

本書は米国ヴァンダービルト大学の歴史学教授 Joele Harrington の “The faithful executioner: Life and death, honor and shame in the turbulent sixteenth century” の翻訳である。この本の題材となった死刑執行人フランツ・シュミットは日記を書き残し

ており、1801年に公刊され、ドイツ語版、英語抄訳版も何度か出され、1987年に日本語訳も刊行されている。しかし著者は、それまで使われていたものより古くて正確な写本をニュルンベルクの市立図書館で発見し、さらにシュミット一族の

名誉回復を皇帝に訴えた請願書をウィーンのアーストリア国立文書館で発見した。この2つの素材を読み込んで、事実を淡々と書き記す日記の背後に死刑執行人フランツの心情の変化を読み取り、その人生と生きた世界を再現したのが本書である。

当時の処刑人は社会から疎外され、名誉なき人たちと見なされていた。フランツの父は横暴な領主によりいきなり処刑人とされ、息子のフランツは父の仕事を引き継ぎ、一族の名誉を回復することを悲願としていた。

本書ではフランツの人生が生き生きと語られるだけでなく、近世ドイツの社会や生活、医療事情も詳しく描かれている。医学の歴史における16世紀という時代、ドイツという地域の状況を知る

ためにも好適な一冊である。解説をボン大学院生の井上周平氏が書いている。

序

第1章 徒弟時代

第2章 キャリアの始まり——遍歴修業時代

第3章 親方として

第4章 賢人として

第5章 治療師として

エピローグ

(坂井 建雄)

[柏書房, 〒113-0033 東京都文京区本郷2-15-13,
TEL. 03 (3830) 1891, 2014年8月, B6判, 376
頁, 2,200円+税]

浦山きか 著

『中國醫書の文獻學的研究』

著者は我が国で数少ない中国医学史研究者であり、しかも、斯学には医学薬学出身者が多い中で、文科系出身であり、中国古典文学から出発されているので、文献学、書誌学に精通されていて、その強みは医薬書に限られない幅の広い文献の渉猟、周到で精緻な論旨の展開に反映されている。

なお、本書は縦組みではなくて、横組みになっていて、若い読者には読みやすいだろう。

第一章 歴史資料による医学史の構築

第一節 医書序文に見る医学史観

第二節 歴代史志書目における医書の範疇と評価

第三節 中国医書における病の配列と構成

第二章 『黄帝内経』の伝承

第一節 問題の所在—『黄帝内経』と中国医学史

第二節 出土医書及び文物から『黄帝内経』へ

第三節 『黄帝内経』所引の古医書について

第四節 二つの『黄帝内経素問』

第五節 『黄帝内経』の再編纂書—『甲乙経』の場合

第六節 隋唐期の『黄帝内経素問』とその引用

第三章 北宋の医書校訂について

第一節 問題の所在

第二節 北宋の医書刊行事業の経過

第三節 校正医書局の設立

第四節 『黄帝内経素問』の校正

附篇Ⅰ 『黄帝蝦蟇経』とその伝承

附篇Ⅱ 本草覚え書き

附録CD 『黄帝内経素問』全元起本、巻一～巻九(巻七缺)』

以上のように目次を写しただけで与えられている頁数の半分を超えるので、評者にとって特に興味深く覚えた章節を取り上げて紹介することで了承されたい。

第一章では、第一節のまとめで、「医書の序文は当該する時代の医学観・歴史観を探る有効な資料であり」、特に『傷寒論』序と『甲乙経』序が基本的な序文として医学史観の形成に寄与してきた」が、とりわけ、『甲乙経』序では、「鍼灸=守り神は黄帝、湯液=守り神は神農」とされていて

医学史の基準となっているとの指摘があり大変新鮮に感じた。第二節では、せっかく「道教目録の中の医書」という項目が立てられて興味深く思ったのに、『隋志』道経部と『旧唐書』道家類に終って『宋史』芸文志に及んでいないのを残念に思う。

第二章第二節では、馬王堆漢墓など出土医書が伝世医書、特に『靈樞』における経脈が『陰陽十一脈灸経』などからどのように連結していくのかが詳しく検討されている。ただし、ここでせっかく提起された経脈血管説が十分に論証されていないのは惜しまれる。

第二章の第三節で『素問』『靈樞』所引の古医書を取り上げて、これまでの馬繼興が古医書を列挙しているのを更に分析して、「先行する四種の医書を「玉機」という名のもとにまとめ、新しい理論を提出したもの」だと考えるなどの考察を行っているが、その当否は別として、他の古医書についても同様の考察を仮説的に進めてほしい。

第三章で考察されている北宋の校正医書局の設立と医書校訂については、岡西為人が『中国医書

本草考』所収の「宋代の医書校勘について」など三篇でいくらかは解説されているものの、本書著者の考察によって、その全貌が明らかになったと言える。特に「医書校定の姿」では、詳細に医書ごとの校定の形式を考察されていて、今後の医書利用に有用であろう。

附篇として収められている『黄帝蝦蟇経』という日本だけに伝承されている鍼灸禁忌書については、かつての評者の浅薄な考察を、その後の「臨模本」発見によって、大幅に深く進められているのを多としたい。

本書はじつに精密な内容だけに論旨を追うのに苦勞するのであるが、にもかかわらず、今後中国医書を考察する場合には、必読書となるであろうことだけは間違いない。

(坂出 祥伸)

[汲古書院, 〒102-0072 東京都千代田区飯田橋
2-5-4, TEL. 03 (3265) 9764, A5 判, 361 頁,
10,500 円+税]